The Fulbrighter in Chubu

NO.9

March 1999

CHUBU Garioa/Fulbright Alumni Association

巻頭言

アメリカの銀行合併問題にみる地域社会と企業の関係

木　下　宗　七

近年の情報技術の進歩には目をみはるものがある。Windows ９５が開発・発売されて以来、インターネットや電子メールが簡単に利用できるようになってから、居ながらにして遠隔地（国内・海外）の情報にアクセスでき、瞬時に国内外の友人や研究者とメールを交換できるようになった。おかげで、私は、時々、フルブライト研究員として滞在したペンシルヴァニア大学の近況をそのホームページで読み、また、かつて購読していたPhiladelphia Inquirer という新聞にアクセクして、フィラデルフィア都市圏の経済や暮らしのニュースを読んでいる。

そのニュースのなかで、１昨年秋ごろから無関心でおれなかったのが、私自身も口座を持っている地元大手銀行の吸収合併問題である。地元フィラデルフィアに本店がある大手銀行が、ノースカロライナ州を本拠地とする大手銀行に買収されることになり、地元に本店がなくなるだけでなく、いくつかの支店が整理されて、１０００人以上が解雇されるという話である。

日本でも金融ビッグバンを迎えて、中小金融機関の合併が進み、大手金融機関の自己破産や自主廃業まで起こっている。どの金融機関もバブル経済崩壊で発生した不良債権問題を処理し、大競争時代に生き残るための構造改革が進行している。アメリカでは、日本に先んじて不良債権問題を解決したということで、日本の不良債権問題処理に関して、しばしばアメリカの経験が話題になっている。

ところが、アメリカの東部では、いまでも、「銀行が多すぎて、お客の方が十分でない」状態であり、銀行の合併吸収が続いているようである。ニュースになっている２つの銀行の経営者は、生き残るための戦略として、相手の銀行を合併し、あるいは、相手の銀行に吸収される道を選ぼうとしていた。

この銀行合併に対しては、フィラデルフィア市当局や地元下院議員が、地域の雇用確保や金融空洞化の懸念から反対の立場をとっていたのは十分理解できる。が、それらに加え、もう１つの反対の理由として、当該銀行がこれまで地域の公益財団等への寄付等を通じて行ってきた社会的貢献が合併によってなくなるのではないか、という

心配が挙げられていた。こうした点からの合併反対というのは、日本ではほとんど耳にしたことがない。アメリカでは、企業と地域社会との関係は日本の場合とは少し事情が違うようである。

結局、この銀行合併問題は、独禁法上での問題はないということで承認され、また社会的貢献についても、合併をした銀行が、地域社会の構成員として、これまでの銀行が行ってきたとおなじだけの社会的貢献を続けるという方針を打ち出したので、地域社会との軋轢も起こらなかったようである。

現在、日本では市場経済のあり方が問われ、企業のあり方、企業経営者の責任の取り方が問題になっている。原点に戻れば、企業は公正なルールのもとで利潤を最大にすることを目的とした組織であり、利潤を生み出せない企業の存在価値はないと言える。利潤を生み出すことこそが、企業の第一義的な社会的役割であるということができる。

しかし、今日の企業はそれ以上のことを求められている。企業は、地域社会と無関係に存在し、活動できるものではなく、法人として自然人である住民と同じように地域社会を構成するメンバーである、という考えである。そう考えると、企業もその能力に応じた地域社会への貢献が必要になってくる。フィラデルフィアでの合併論議を読んでいると、アメリカではこうした企業の捉え方が強いようである。

（ガリオア・フルブライト中部同窓会会長）

" International educational excahnge is the
most significant current project designed to continue
the process of humanizing mankind to the point.....
that people can learn to live in peace. "

J. William Fulbright

FULBRIGHTER IN CHUBU NO.9

目　次

巻頭言 ---------- 木下宗七 ---------- i

ゲスト・スピーチ

仮想世界における多言語通信の検討 ---------- Christpher Boudreau ----- 1

解説 ---------- 岡田　稔 ---------- 6

最近の金融経済情勢について ---------- 原田靖博 ---------- 8

随　想

あの頃（1950-51）が好きなわけ ----------堀　菊子 ---------- 14

開眼 ----------寺西勇二 ---------- 15

私にとってのFulbright Program ---------- 和爾赳城 ---------- 17

デラウエアー大学への留学 ---------- 山田健治 ---------- 19

Busy as a Bee ---------- 森　あおい ---------- 20

米国人Fulbrighter紹介 ---------- 21

会員便り ---------- 22

会員移動・名簿変更 ---------- 32

報　告 ---------- 25

総会記録

例会記録

役員会記録

平成９年度収支決算書 ---------- 30

平成１０年度予算案 ---------- 31

事務局より ---------- 33

ガリオア・フルブライト総会　講演

「仮想世界における多言語通信の検討」

Christopher Boudreau　（フルブライト・フェロウ）

丁寧な紹介をいただき、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は日本に来てまだ９ヶ月だけですが、今日は日本語で私の研究成果を発表したいと思います。

それでは、始める前に、みなさんに質問をしたいと思います。「みなさんは米国で研究をされたわけですが、その時、英語の上達にいちばん役だったことは何だと思いましたか？」 そうです。 英語（外国語）がいちばんうまくなる方法は、Native Speakerと話をすることです。今日はこのことについて、「仮想世界における多言語通信の検討」というタイトルでお話ししたいと思います。

学生に外国語を上達させる教育用具を提供するためには、まず、外国語の学習方法を理解しなければなりません。ほとんどの学生は学校で何かの外国語の授業をうける必要があります。しかし、外国語がうまくなる学生は少ないです。それはどうしてか？外国語の授業で何が問題なのか？　それは、学生が授業で先生から外国語を聞くことしかしないからです。その国にいるように、周囲（Native）の人からその国の言葉を聞くことはありません。そのうえ、授業が終わると、母国語に囲まれます。これでは、学んだことを忘れてしまいます。ところが、留学プログラムに参加し、native speakerと一緒に話すチャンスがある学生は外国語の上達が速いです。母国では何年もかかる外国語も、外国にいると数ヶ月でマスターできます。そのため、多くの政府は留学することを支持しています。しかし、留学に興味のある学生でも、どういうわけか実際に留学する学生は少ないです。それで、私は、「こうしたらどうだろうか」という一つの提案をしたいとおもいます。

「あたかも海外にいるように、たくさんの native speaker との会話の経験が simulate できるようにしたら、どうでしょうか。この経験が外国語にうまくなりたい誰にでも可能であったらどうでしょうか。人々がインターネット上の web を navigate するように、国際間を旅行できたらどうでしょうか。本当に海外にいるように、家で外国語が学べたらどうでしょう。」

このシステムを作るのに必要な点は何でしょうか。世界で遠くに離れているところにいる外国語学習の学生と native speaker とが、あたかも向かい合っているかのように会話をすることができることでしょう。

私が提案するのは、「インターネットの同時仮想世界システム」です。この仮想環境の中で、学生は avatar　という３Ｄ（三次元）人間体となって、仮想空間を探検し、他の仮想空間にいる人と会い、会話ができます。

現実世界では、native speaker と一緒に向かい合って会話ができます。

仮想世界では、他の avatar と一緒に、live な voice chat ができます。

現実世界では、読み書きが上達するために、native speaker と文通ができます。

仮想世界では、native speaker と live な text chat ができます。

現実世界では、外国語の単語がわからないと辞書を使います。

仮想世界でも、同じように辞書に access できます。

最後に、

現実世界では、たくさんの学生が海外で外国語授業を受けることができます。

仮想世界でも、学生は外国語教授に access できます。

インターネット上での現在の VR project には、どのようなものがあるかをみると、三つあります。

1）Active Worlds ：訪問者が自分の３Ｄ世界を作成し、他の人と text chat をすることができる。これは人気のある複数ユーザ仮想世界んのプロバイダであるが、学生が外国語を学ぶのに役立ちません。外国語の辞書や語学レッスン、voice　chat がないからです。

2) OZ Virtual ：商用の複数ユーザ仮想環境を与えますが、これも学生が外国語を学ぶのには役立ちません。

3) Online! Traveler ：仮想世界の voice chat　では有名。しかし、仮想環境の中には探索する空間が少ないし、avatar は浮いている頭のように表される。

そこで、私は project ORBIS という新しいプロジェクトを提案します。このシステムは仮想世界 navigation、複数ユーザーが参加でき、３Ｄの avatar を提供するだけでなく、オンライン辞典、virtual teacher（仮想教師）による外国語のレッスン、上達度記録、母国語のフォントサービスを提供できます。

それでは、project ORBIS　はどう動くのでしょうか。日本語と英語を例として、このシステムの使い方を、つぎの８つのステップに分けて説明します。

1）登録とダウンロード・プロセス

2) 身元確認と更新プロセス

3) 仮想世界

4) 仮想世界での会話

5) native speaker の配置

6) virtual teacher による外国語レッスン

7) 上達度記録

8) 自分の profile の編集と project ORBIS　メンバー・ディレクトリの使用

学生は、ORBIS の website, www.okada.ecip.nagoya-u.ac.jp/~chris/ORBIS/, を訪れることでスタートします。このウェブサイトは日本語版と英語版が使えます。

まず、学生は、登録することで　” language profile ” を作成します。ここでは、自分の言語背景とインターネットの接続方法を記述します。

登録が終わったら、仮想世界に入るためのソフトウエアをダウンロードします。そのうえ、仮想世界をダウンロードして、VR ブラウザと日本語のフォントサポートをダウンロードします。ORBIS は独立した VR ブラウザとして Windows　95 の Sony Community Place Browser　を使いますが、このシステムは VRML ９７に対応するブラウザに適合させることができます。英語版の windows　95 ユーザが仮想世界で日本語を読み書きするためには、日本語のフォントサポートを導入しなければなりません。

仮想世界をダウンロードしたら、アイコンをダブルクリックすることで仮想世界に入ります。まず profile のパスワードを入力します。そうすると、自分の language profile が load されます。

ORBIS での最初の仮想世界は日本語と英語を学習する学生のためのものです。徳川にならい名古屋城を造ったので、「仮想名古屋城」と名付けます。図ー１は仮想名古屋城の地図です。仮想名古屋城は実際の名古屋城と少し違います。名古屋城のデザインをまねして、城の目印をつけてみました。本物の名古屋城では休憩所は１つですが、仮想名古屋城には４つあります。茶屋も、本物では１つですが、仮想名古屋城には３つあります。そして、仮想名古屋城のさくらは毎日咲きます！

仮想名古屋城には、学生と native　speaker　の間でコミュニケーションを行う方法がたくさんあります。

1) 日本語（母国語）と英語（外国語）の両方で読み書きができる。また、文字でコミュニケートする chat box が使える。

2) コンピュータにつけたマイクとスピーカーによるライブでの voive　chat が行える。

3) 双方向のオンライン辞書（日本語から英語へ、英語から日本語へ）が使える。辞書は別の window で表示される。学生は自分の avatar を動かすことができる。

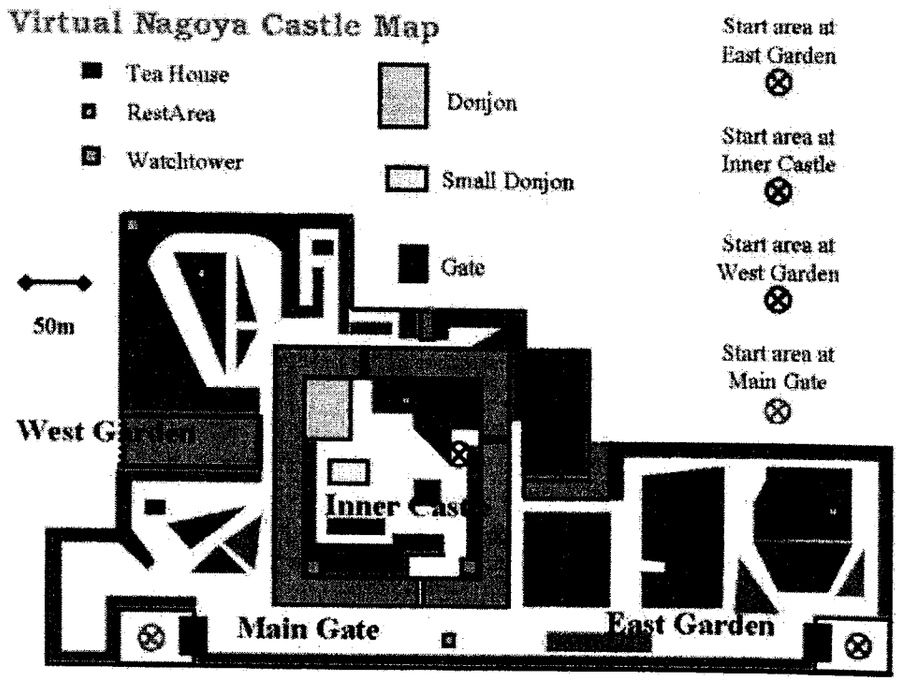
学生は、各自の語学能力の評価により、仮想世界のどの部分に入れるかを決められます。仮想名古屋城には４つの部分があります。２つの学生のグループは同時に外国語を学習します。日本語を話す人は英語を学び、英語を話す人は日本語を学習します。それぞれのグループは相手から学びます。外国語を学ぶ学生には、一緒に学べる native speaker がいつもついています。

日本語の初心者である英語を話す人は、英語を native　speaker　みたいに話す日本人と一緒になります。ある程度日本語が話せる人は、ある程度英語が話せる日本人と一

緒になる、という具合です。外国語が上達すると、学生は彼らの母国語にあまり精通

Project *Orbis* -
the **best** way to learn a foreign language

C:¥castle_map.jpg (ローカル)



していない native speaker と一緒にまとめられます。学生は native speaker の１つのグループと一緒に学習を始めますが、仮想世界のどこに行くことも、誰と話すのも自由です。

学生は、語学能力の評価により、仮想世界でどんな外国語のレッスンを受けるかが決定されます。仮想名古屋城の virtual teacher はこの人です。彼女は一日２４時間外国語のレッスンをしてくれます。学生は仮想名古屋城のどの休憩所、茶屋でも彼女を見つけることができます。virtual teacher はログイン情報から学生を識別します。仮想先生は学生と一緒に、読み書きの練習を行うことができます。

学生が virtual teacher の出した小テストに合格すると、ＯＲＢＩＳは学生の成績を記録します。それによって、ログインするたびに、学生は新しいレッスンを受け、前にしたことの復習ができます。学生は好きなときにレッスンを始め、好きなときに止められます。もし、レッスンが難しすぎたり、易しすぎたりすることがあれば、学生は virtual teacher と一緒に,自分の language profile を調整することができます。学生が上達すると、もっと複雑な文法の教授をうけ、彼の母国語があまり上手でない native speaker のグループに入ります。

外国語学習の学生は、プロジェクトＯＲＢＩＳの web page で language profile を編集し、他のメンバーの検索もできます。仮想世界でどれくらい母国語と外国語を見聞きするかを調整できます。

プロジェクトＯＲＢＩＳは、インターネットで利用できる言語習得のための教育用具ですが、今後の課題も残されています。virtual teacher は、native speaker がいない時、学生の話し相手になりますが、そのためには、日本語と英語のスピーチ recognizer が仮想名古屋城に必要です。Sony の Community Place Browser を使えば、生の音声コミュニケーションを処理することができます。Java エクステンションは、たくさんの人とのコミュニケーションやスムーズな音の送信について、研究しています。

これまでの話をまとめます。私のプロジェクト ORBIS はインターネットを使って、日本語を習おうとする英語を話す学生と英語を学ぼうとしている日本人の学生が、「仮想名古屋城」で外国語のレッスンを受け、native speaker と会話することで外国語を上達させようとするシステムです。オンライン辞典は学生のコミュニケーションの手助けをしてくれます。

外国語を学ぶには外国に住むことが一番よいことですが、プロジェクト ORBIS は、インターネットを通して、あたかも外国にいるような感覚で、外国語を学ぶ学生と native speaker とが交流できるようにしようとするものです。 外国語の授業にも使えるものです。

【解　説】

岡田　稔
（名古屋大学大学院工学研究科助教授）

C. Boudreau 君は，平成9年9月に来日し，10月より翌10年9月まで1年間，名古屋大学工学研究科電子情報学専攻の研究生として私の研究室に在籍した．同君の研究テーマである仮想世界における多言語通信の検討は，最近のトレンド技術である，インターネットナビゲーション，仮想現実（Virtual Reality）の両者を組み合わせた意義深いものである．私の研究室では従来よりネットワーク，画像の認識と理解，コンピュータグラフィクスを核としたメディア環境に関する研究を展開しており，本研究テーマを遂行するのに相応しい環境があったと自負している．

さて，インターネットでは，主要な利用方法として電子メール，ネットニュースと並んで WWW: World-Wide Web という巨大な分散データベースシステムが有機的に増殖している．ここでは Hyper Text と呼ばれる文書，画像，音声などを含むマルチメディアデータを統合的に扱う HTML（hyper text markup language）記述言語が使用されている．専門家だけでなく，一般のインターネットユーザでも各自の Web Page を作成し，個人レベルの情報発信が可能となっている．これを拡張して三次元的な広がりを持つ仮想空間を表現し，ユーザがナビゲーションするための新しい記述言語である VRML（Virtual Reality Modeling Language）が普及しはじめている．仮想現実という言葉はかなり社会的に認知されつつあり，マスコミでも取り上げられているが，その実現にはまだまだ高度な専門的知識を要求される発展途上の技術である．その仮想現実を非専門家でも扱いやすくするために標準化されたのが VRML である．しかし，VRML はまだ未知の可能性を秘めた技術であり，その応用が模索されている段階と言えよう．

VRML ではその仮想空間の中に，現実の世界と同様な道路，建物，部屋，家具などを配置して自由に移動（walk-through）することができる．その空間を複数のユーザが共有することになるが，自分を含む各ユーザは，アバターと呼ばれる擬人化エージェントで表現される．すなわち，各ユーザは自分のアバターの目を通して仮想世界と会話するわけである．このような VRML の仕組みを積極的に利用して外国語学習を行うのが本研究の目的である．本研究の具体的な内容はスピーチ原稿を御覧戴ければ御理解いただけるが，この研究の特色は相補型学習というメカニズムにある．すなわち，英語を学習する日本人と日本語を学習するアメリカ人というように，異種の学習者を同一の仮想世界で対峙させ，相互コミュニケーションをはかりながら学習ステージを高めていく，というものである．その基本メカニズムを補完するかたちで仮想教師，双方向辞書による学習環境が整備されているわけである．

本研究はすでに日本国内の学会はもとより，以下の様に国際会議でも採択・発表されており，マルチメディア時代の先端を行く技術として世界的に注目されている．

[1]C. Boudreau and M. Okada: "A Study on Multilingual Communication in Virtual Worlds", Proc. of 1998 IEICE Annual Conference, D-12-129（1998-3）（電子情報通信学会総合大会・東海大学）

[2]C. Boudreau and M. Okada: "A Foreign Language Acquisition System in A Virtual World", Tokai Electric Societies Joint Conference, 720, p.360（1998-9）（電気系学会東海支部連合大会・三重大学）

[3]C. Boudreau and M. Okada : "The Foreign Language Acquisition System of Project Orbis: An Example of Educational, Customizable Language Exposure in a Shared Virtual Environment", Proc. of I'MEDIAT'98 - Information Mediation First International Workshop on Practical Information Mediation and Brokering, and the Commerce of Information on the Internet,（1998-9, SUT/Tokyo/Japan）

[4]C. Boudreau and M. Okada: "Project Orbis: A Shared Virtual Environment Foreign Language Acquisition System", Proc. of APWeb98 - Asia Pacific Web Conference : Web Technologies and Applications, pp. 15-23（1998-9, Beijing/China）

[5]C. Boudreau and M. Okada: "Customizable, Instructional Foreign Language Exposure in Shared Virtual Environments", Proc. of VSMM'98 - 4th International Conference on Virtual Systems and MultiMedia 1998, Vol. 1, pp. 54-59（1998-11, Ogaki/Gifu/Japan）

中部同窓会　例会での講演

最近の金融経済情勢について

日銀名古屋支店長
原　田　靖　博

ただ今ご紹介にあずかりました日本銀行名古屋支店長の原田と申します。今回は、このようなガリオア・フルブライト同窓会の方々の前でお話することになり、光栄でございます。私はアメリカの大学には留学しておりませんが、１９９４年から１９９６年までの２年間、日銀のアメリカにおける代表としてニューヨークに住んでおりまして、アメリカ金融界や全米のいろんな所でお話をしたり、調査をしたりという機会があり、アメリカの金融市場や経済のダイナミズムを体験することができ、非常に面白く過ごさせていただきました。

Ⅰ　金融動向

はじめに、日本銀行の金融政策について、お話したいと思います。ご案内のように、いま日本の短期金融市場におけるオーバーナイトの金利は、日本銀行の金融政策によって 0.25 %という非常に低い水準にあり、歴史的にみても従来にない事態であります。それは、勿論、日本の実体経済が非常に長期に亘り停滞しており、それを立て直すために、そうした異常な金融政策を採っておるわけでございます。

こうした低金利によって他の金融市場においても異常なことが起こっています。その最たるものがロンドン市場における円マイナス金利というものです。これは、ロンドンのインターバンク・マーケット（銀行間の市場）で、１１月３日から１１月４日の２日間において、バークレイズバンクというイギリスの銀行が円の３ヵ月ものの貸出金利で、マイナス 0.04 %を提示しました（３日と４日は、２ヵ月ものから６ヵ月ものまで、マイナスの金利が提示された）。まず、金利がマイナスというのは非常に異常なことであり、普通はお金を貸しますと、貸し手は金利を受け取る訳ですが、この場合は、お金を貸した人が更に手数料を 0.04 %払うということになっている訳です。

これは、理屈の世界では考えられますが、実際のマーケットでこういうことが起きたということは初めてだと思います。３日と４日の非常に短い期間ですが、こういうことが起きたこと自体が、極めて異常なことであります。

何故こういうマイナス金利が起きたかということを説明しますと、基本的には、ジャパンプレミアムというものが関係しております。ジャパンプレミアムとは、例えば３ヵ月もので日本の銀行が調達するドル金利とアメリカないしヨーロッパの信用度の

高い銀行が調達するドル金利との差で、昨年の１１月、北海道拓殖銀行とか山一証券の問題が生じたときには、１%位余計に金利を払わないと日本の銀行はお金が借りられないという状況になりました。その後ジャパンプレミアムはしばらくして収まり、５月頃には 0.2 %位まで縮小しましたが、この１１月には 0.7 %位まで再び拡大しております。こうしたジャパンプレミアムが、円の金利が非常に低い中で発生すると、インターバンク・マーケットで金利がマイナスになることがありうるということであります。

それでは、この１１月にどういうことが起こったかといいますと、まず、日本の銀行も海外で相当活発な金融活動を行なっているわけですが、特に１２月というのは、アメリカの企業においては年度末に当たりますので、多額の資金決済をおこなわなければいけなくなります。従って、１２月末にはドル資金が日本の銀行にとっては非常に必要になる訳です。しかし、アメリカやユーロのマーケットで、日本の銀行の信用度が低下しているため、なかなかドルを借りられない。そこで、どうするかというと、円を日本の金融市場で借りて、この円を為替市場で売ってドルに替える訳です。ただ単純に円をドルに替えるだけですと為替リスクがありますので、３ヵ月の資金ですと、直物で円を売ってドルを買い、３ヵ月先物でドルを売って円を買い戻す、というオペレーションを行い、年末のドル資金の手当てをしようということになる訳です。

この日は、日本の銀行は、0.7 %で円を調達して、それをドルに交換する訳ですが、その日は、ジャパンプレミアムが 1.1 %であったため、日本の銀行のスワップコストは 5.8 %となり、ドル資金の調達コストは 6.5 %になってしまう訳です。ジャパンプレミアムがない場合のスワップコストは 4.7 %で、この時のドルの調達コストは 5.4 %となります。

日本の銀行がこういう取引でドルを調達するということは、当然、アメリカの銀行では、逆の取引が起こっているということになります。すなわち、日本の銀行が円を売ってドルを買い、ドルの決済に当てようとすれば、相手になるアメリカの銀行は、日本の銀行にドルを売って円を手にいれる訳です。この場合、アメリカの銀行は 5.4 %でドルを市場から調達し、それを 5.8 %のスワップコスト（正確にはスワッププレミアム）を受け取って円を手に入れている訳ですから、円の調達コストは結果的にマイナス 0.4 %（5.4 %-5.8 %=▲ 0.4 %）になるという事態が生じる訳です。

従って、たとえばバークレイズにとってみれば、調達した円の資金の金利がマイナスになっている、つまり、おまけをもらって円資金を調達しているので、貸す時にもマイナスの金利でも、十分貸せるということになるわけです。要するに、日本の金利が非常に低くなっているということと、日本の銀行がジャパンプレミアムを払わなければいけない、という２つの事実がありますと、バークレイズとか J.T.モーガンという海外の一流銀行が得る円の調達コストがマイナスとなる、という事態が発生するこ

とになります。

これが異常な事態の最たるものですが、日本の金融市場におきましても、かなり異常というか、大きな変化が起こっています。日本銀行の金融政策は、準備預金残高を調節することによって金融市場の金利を動かし、その結果としてマネーサプライを動かし、さらにＧＤＰにも影響を与えるといった波及経路を辿る訳ですが、それが、いま効きにくくなっています。どういう具合に効きにくくなっているかというと、日本銀行が市中銀行に資金を供給すると、市中銀行は手元資金が増えますので、そのお金を元金にして信用供与を行う訳ですが、その信用供与を生み出す働き（信用乗数（注））が９０年以降急速に下がってきています。これが何を意味するかというと、日本銀行がマーケット・オペレーションで一生懸命資金を銀行に供給しても、その割りに市中銀行が貸出を増加させていないということに示している訳です。

更にもう１つ異常な現象が起こっておりまして、それはマネーの流通速度（名目ＧＤＰを分子、マネーサプライを分母としたもので、お金が実生活の中でどれだけ回っているか、というお金の回転速度を示すもの）が、傾向的に下がっておるのですが、特に９７年から９８年にかけて非常に顕著に下がっている。これが何を意味するかというと、市中でお金が回っていない、極端に言えば、一回銀行から引出されたお金がタンス預金になってしまうため、そこでマネーの流れが止まり、いくらマネーを銀行が供給しても、それを使って経済活動を刺激するという方向に向かわない、ということを意味しています。従って、日本銀行がいくら市中銀行にお金を貸しても、市中銀行は、それをもとに貸出をしようとしない。また、一般の経済主体も銀行からお金を借りたり、ないしは所得を銀行に預金しても、それをもう一回使って商売しようとしない、という状態、すなわち、いま、日本の金融機能が大幅に低下している状況にあるということです。

これは非常に異常な事態ですが、これ自体は、経済主体が設備投資や在庫投資をしたり、個人が消費をしたりと、経済活動を活発にやろうというインセンティブが非常に少ないということを意味しますし、市中銀行が活発に信用供与活動を行なおうとしないということを意味しております。従って、日本銀行が今行っていることは、はかない努力であるかも知れないですが、できるだけ資金を供給して、そうでない場合よりは市中銀行が出来るだけ信用供与活動を活発にし、その結果として実体経済でも投資活動がより活発に行われるようにしよう、そのために、当然金利も下がるようにしようという具合に考えている訳です。

ただし、やはり金融政策でやれることにはある程度限界があり、これはケインズがよく言う「流動性の罠」すなわち、金利水準が非常に低くなっておりますと、日本銀

（注）信用乗数=マネーサプライ（Ｍ２+ＣＤ）/マネタリーベース

行が準備通貨を供給して銀行間の金利を下げたとしても、流動性に対する需要があまり盛り上がらないという状態に入っている訳です。完全な「流動性の罠」にはまっていれば、金融政策というものは殆ど効果がない訳ですが、我々としてはそこまで思いたくないので、「流動性の罠」でも全く動かない「罠」ではなくて、多少は動くだろうということで一生懸命、流動性を供給しております。

日本銀行からみれば、ここまでマネーを供給しているにもかかわらず、景気はすぐにはよくならない。これは、ＧＤＰギャップというか、潜在的な日本全体の供給能力と実際に現実にある需要との間に非常に大きなギャップがあるためです。このギャップは、結局、財政という形で、減税なり公共投資をして埋めないと、経済活動のレベルは今以上に活発にならないと思います。

やや技術論になりますが、日本銀行が市中金融機関にどれだけ信用供与しているか、市中銀行がいかにその資金を使っていないかということを説明します。現状日本の預金の受け入れ機関、すなわち銀行、信用金庫、農林中金などの金融機関は、法律で日本銀行に無利子で準備預金を積まなければいけないことになっています。これは、法定の準備で、しかも無利子ですから、基本的には市中銀行は日本銀行に対して超過準備（法定異常の準備）を積むということはしない。しかし、去年の１１月には１日当たりで１，４５８億が超過準備として積まれ、今年の１０月にはかなり増え１日当たり３，３４２億円が超過準備として日銀に積まれたことになります。

こうした資金はそもそもは日本銀行が手形を買ったり、国債を買ったり、ＴＢを買ったりして、市中から金利を取って供給したお金です。従って、市中銀行は普通はそうした資金を借りれば、全部使ってしまって、日銀には法定準備以上に無駄なお金は積まないのですが、現状、法定準備以上に準備預金が積まれている訳です。この背景には、短期金融市場金利が非常に低く、無利子の日銀に預けても、他の銀行に資金を貸し出しても大して違わないこと、また、もしかしたら、相手の銀行が何かのはずみで倒れたり、返してくれなかったりしたら、困るというように、銀行間の信用リスクが非常に高まっているということがある。こうした法定準備を超えた準備預金の積み上がりや円のマイナス金利がロンドン市場で起きるのも、すべて、日本の銀行に対する信用度合いがかなり低下しているということと、円の金利が非常に下がっているという、２つのことに起因している訳です。

なお、そうした信用格差、信用が高い金融機関は低コストで資金を調達でき、信用が低い会社は高いコストを払わないと調達できない、ということは、いつでも起こっていることですが、現状は、それが極端になっています。９６年にはＢＢ、ＢＢＢの会社でも社債を発行できていたのですが、９８年の４－６月以降はシングルＡ以上の会社でないと、社債が発行できない。それは、日本の投資家が会社の信用度合いに極端に神経質になり、信用度合いの低い社債は持たないという状況になっております。

また、流通市場での金利がどうなっているかというと、国債とＡＡＡの社債との金利差は０．５％、シングルＡで１．３％位開いている。この開き具合を時系列を見ていくと、信用度合いが低くなるに従って金利格差が拡大してきている。

このように社債の金融市場もかなり機能が低下している。本来であれば、全てのトリプルＡからＢＢの市場まで、あらゆる企業が格付けに応じた金利差を払うことによって資本市場から資金が調達できなければいけないのですが、格付けの低い企業は相当高い金利を払っても、なかなかというか、ほとんど調達できない状況に陥っている。

こうした中、日本銀行は、例えば今年の１０月でいいますと、企業が発行しているＣＰ残高全体１１.１兆円のうち、3.8 兆円を（売り戻し条件付きで）買い取り、その見返りとして日本銀行から市中銀行に資金供給を行っている。これは、一部の企業がなかなか資金を調達しにくい、銀行がなかなかお金を貸したがらないという中で、日本銀行としても企業が直接、資金を調達できる手段をできるだけ活発化させよう、優良な企業のＣＰを銀行経由で買い取ることによって、ＣＰ市場を発達させようとして一生懸命やっているのです。また、１０月の銀行の貸出の伸び率（前年同期比）は-3.3％となっています。ただ、これれを捉えて一般の新聞等では”貸し渋り”といっている訳ですが、これ全部が銀行が貸せるのもかかわらず貸さない金額ではなく、もともと企業の活動自体が非常に低迷していますから、資金需要が無く、お金を借りたいという意欲が非常に少ないということ、銀行は過去の不良債権を償却した結果、自己資本が少なくなっているためなかなか信用供与を活発に出来なくなっていること、さらに、景気低迷により企業の信用（財務）状態も相当悪くなってきている中、銀行としてもすぐ貸し倒れになるような貸出はやりたくないこと、などの色々の要素が重なった結果、貸出残高が前年比で▲ 3.3 ％減っているのです。

もっとも、東海地区では、それでもまだ銀行の貸出が活発で、地元１０行の貸出残高は前年同期の水準と比較しますと、僅かですが 0.3 ％増えており、全国とは違うことが東海地区で起こっています。これは、東海地区の銀行は、全国の銀行に比べて、相対的に自己資本比率が高い、自己資本をかなり持っているため、信用供与活動が相対的に活発に行える。また、東海地区の企業は全国の他の地域、特に北海道とか九州とかの企業に比べると、相対的に元気のいい企業があるので、銀行としても貸せる企業が多い。この２つの要素の結果、一時期に比べると随分下がっていますけれど、なおプラスの伸びを維持し、更に全国との格差も 3.5 ％位、開いている訳です。

こういう具合に、市中の銀行が貸さないために、どういうことが起こっているかというと、中小企業金融公庫や国民金融公庫が一生懸命貸しているのです。このこと自体は、お金が借りられなくて困っている企業が借りられることになるので、いいことなのですが、本当はこれでいいのかという問題があります。市中銀行は自分のところに資本がたりないということもあるのですが、やはり危なくて貸せないと思っている

先が結構あるということです。それを、中小公庫とか国民金融公庫が「じゃあ私が貸しますよ」ということで、貸している。勿論、全部が全部、危ない貸出先ではありませんが、相対的に危ない貸出し先が多い。

中小公庫や国民金融公庫が貸しているお金がどこから来ているかというと、これは、皆さんの郵便貯金であり、厚生年金である。従って、中小公庫などの貸出がもし貸し倒れを起こすようなことがあれば、将来皆さんの年金や郵便貯金が返ってこないかも知れない。よくマスコミなどが、国民金融公庫等が貸して世の中非常にうまくいっているというのですけど、よくよく考えてみると、その裏には大きな貸し倒れというしわよせが公的部門にいっている。だからといって、銀行がけしからん、公庫がけしからんとか、という議論ではなくて、やはり、日本の経済、金融システム全体を建て直すことが不可欠である。すなわち、日本経済の活動を活発化して企業の倒産を少なくなるようにするし、金融システムを建て直して、自己資本を銀行がたくさん持ち、ちゃんとリスクを判断して貸せるようにしないといけない、ということになる訳です。

II　金融システム問題

わが国の金融システムは上述のとおり、金融機関に対する不信感が強く、これを建て直さないことには、日本経済もなかなか回復することができない状況にあります。金融システムを建て直すためには、どういうことをすればいいかというと、これには、奇手、妙案というものは殆どなく、やはり、ここは、オーソドックスなことをやらなければいけないということになります。オーソドックスなことは何かというと、まず、銀行は信用を回復すること。日本の銀行はなかなか世界から信用されないのは、不良資産の状況とか、その処理の状況を全部、透明に公開していないためです。それを公開すると危なくてしようがない、という人があるかもしれませんが、とにかく、私の銀行はこんなに不良資産がありますという具合いにディスクロージャーを徹底的にやる必要なあります。

そのとき、勿論言い放しですと、取り付け騒ぎが起こって潰れる可能性がありますから、不良資産の処理計画を併せて公表する訳です。不良資産を処理すると、自己資本がその分だけ減ることになるが、それでも足りなくなってきたら、公的資金によって資本の状態を改善するということをやる。

それと同時に、今までのように、どの銀行も同じようなことをやっていたのでは、競争力もつきませんし、存在意義の乏しい銀行もある訳ですから、それぞれの銀行が存在意義を発揮するためにも、比較優位をもっている分野に資源を投入し、それ以外の不採算部門は切り捨てる。いわゆる経営資源の「選択と集中」をやることは必要となってくる。この３つを、順番にというよりは同時にやっていかなければならないし、やっていけば、日本の金融システムは建ち直る訳です。

随　想

あの頃（1950-51）が好きなわけ

堀　菊子

通称ガリオア留学生（第１回文部省派遣留学生）の試験はまことに簡単だった。　第一次筆記は英語自由作文で、テーマは「日本の将来の教育について」であった。漠然としたものには何となく応ずるしかなく、例のリンカーンの名演説ー今も深く愛され信じらっれているー「人民の人民による人民のための政府」を拝借し、人民の人民による人民のための教育こそ、この国の将来を建て直すものと思うと書いたら、一次試験を通り、暫くして口頭試験（第二次）に呼び出され、試験官はたった一人で、彼は皮肉に「人民の人民のよる人民のための教育がこの国で出来るかねえ」と問いかけた。「さあ、何だった結果は五分五分でしょう。世阿弥はまず試みて良きにつくべし、といって遂に能楽をあそこまで磨き上げたんです。まず自由な実施こそ第一歩です。」と無責任に放言したら、「ああそう、じゃこれで終わります。」と放免され、その後しばらくして留学決定の通知を受けた。

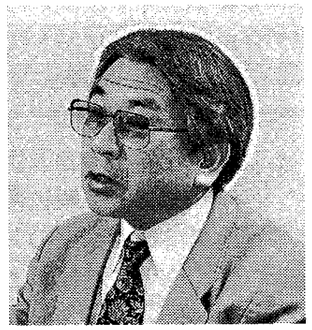
丁度その折りに朝鮮戦争が起こり、渡米出発日時は新聞ラジオ等で通知されることになった。簡単な身の回り品の荷物を整えながら、ゲーテの言葉「人生は真剣な冗談である」を思い出したり、留学も流産かなあ、と考えたりしながら駒込病院伝染病科研究生として忙しく働いていたところが、ある日、ラジオで留学生集合の号令。早速横浜港に集まり、あれよあれよという間に軍用船に積載され、一挙に百人近い留学生が渡米。オリエンテーションコースを受け（私はニューヨークに近いアーバニイであった。）、その後各自の割り当てられた大学に配置された。私はノース・カロライナ大学公衆衛生学部であった。一年余の学生生活は実に楽しく、あっという間に過ぎ、卒論提出。ＭＰＨ（マスター　オブ　パブリック　ヘルスはマイル　パー　アワーとよく笑われた）をもらい、サンフランシスコあたりに集合。又や軍用船に乗せられて無事帰国。たしか宮沢喜一氏も我々のグループに居られた？と聞いた。

私の卒論は全く手前勝手な両国（日本・米国、勝者・敗者も問題が多かった）批判論であったが、教授はわざわざ私をよんで、「論文の趣意は興味深く読んだ。日本には日本の行き方があるのだ。貴女は日本に帰ったらしっかり働いて、ここに学んだ一年の事を色々役立ててほしい。」とやさしく励ましてくれた。

帰国後、公衆衛生院、予研、日医大等でごくあたりまえに生き、働き、やがて生まれ故郷の静岡に還ってきたが、青春時代（留学生時代）のあの自由な解放感、決断力は追憶のなかからよみがえって私を支えてくれた。私があるとき何気なく「イヤ味な優等生的な生き方にならないように心掛ける」と言ったとき、友人は即座に「なるわけないでしょ」と笑って応じた。思えば優等生であったのは小学生時代だけだった。私の友人はドジなロバかロボットのように働いた私の産婦人科医時代を見て心配してくれたのである。働くのは生来嫌いで、多年心ならずも無理をして働いたわけである。

現在は静岡駅前の借医院で午前中だけ外来の仕事をし、午後は乱読、落語、昼寝、若い人達との会合で過ごす。自宅に何となく集まり、たまってしまった本を納める書庫がある。友人の命名で「えらいぶらりい」と呼ばれているが、読まない本が増える一方である。若い頃、頑固に無駄な抵抗をしたこの国の軍国主義も消え、同時に自分の体力、読書力、ひねくれ方も衰退した。それにしても、やはりあの頃（1950-1951）はたのしかった。ヘッセの「青春は美し」やファウストの「時よ、とまれ、お前はあまりに美しい」（(verweile doch, du bist so shon)の言葉通りのあの頃であった。あの頃が好きなわけである。（１９５１－５２，ノースカロライナ大学）

開　眼



寺西勇二

1999 年は私の母校南山大学の創立 50 周年にあたります。昨年 11 月には、そのプレ・イベントとして、キャンパスフォーラム"We love Nanzan"を開催し、私はパネラーの一人としてフォーラムに参加しました。4 万人余のＯＢの中からどうして私が選抜されたかについては、私がこの大学が受け入れた視覚障害学生の第一号だったのいう理由の外に、日本初の盲人フルブライターだった事もその一つの理由だったかもしれません。

1956 年、私は南山大学文学部教育学科を「優秀な成績？」で卒業しました。当時は盲学校から普通の大学に進学する事は、ごく希で、点字受験もまだ今のようには制度化されておらず、私は「テスト・ケース」として無試験で入学を許可されました。

期末試験も点字で書いた答案を先生の前で自分で読み上げて採点してもらうと言う方法でしたから、頭の中でたっぷり時間を掛けて書き直した答案を読み上げることができたので、教科によっては、他の学生にいささか水を開けることも不可能ではなか

ったのです。卒業一年後（1957年）に、フルブライトの Travel Grantee として、ボストン大学教職課程の実習校だったパーキンス盲学校で研修することになりましたが、面接などを通じ、グラントの選考に当たられた委員の皆さんは、私のその時の学力や語学力は見ないことにして、きっと未来の可能性に掛けてチャンスを与えて下さったのだと思います。

パーキンス盲学校はヘレン・ケラーを教えたアン・サリバン女史がかつて学んだ学校として広く知られ、全世界から盲児や盲聾児の教師を研修生として受け入れて来ました。私はこのキャンパスで「ボランティア」と称する人たちに初めて接し、また「コカ・コーラ」と言う飲み物も初めて口にしましました。

今では、ボランティアもコーラと共に日本の社会に定着したかにみえますが、「社会的弱者」を取り巻く状況は当時から質的に大きく好転したとは思われません。 言うまでもなく、人はどれほど優れた素質に恵まれていてもチャンスがなければ自己実現を通じて社会的役割を果たすことはできません。しかし現実にはわが国の障害者は多くのチャンスから阻害され、「完全社会参加と平等」は理念にすぎません。私がほぼ半世紀昔にこの国で進学のチャンスや海外で学ぶチャンスを得ることができたのは、本当に希有の幸運だったと言わざるを得ません。

ところで去年の正月、私の大事な右目（少し視力のある方）が酷く痛み始めました。そのおり受診した眼科医によるとそれは「移植した角膜の反乱」でした。

私が角膜移植手術を受けたのは 26才の夏でした。Mr. Crane と言う見知らぬ人から「もし貴方の目が手術で少しでも良くなるようなら、医療費全額を提供しよう」と言う思いがけない申し出を受けたのは、渡米した年の秋の事でした。Mr.Crane はある日本人留学生の知人から私のことを聞いて早速手紙を下さったのでした。

当時最先端の医療技術だった角膜移植は日本ではまだ殆ど行われておらず、両目の手術には前後６週間の入院費を含め３千ドルもの治療費を要しましたが、一面識もない無名の留学生（私）のためにそのアメリカの企業家は全額を黙って支払って下さったのでした。

私の目はその手術によっても、失われた視力を取り戻す事は出来ませんでしたが、真の人類愛に目を開くことが出来ました。人種・民族・国境を超越した「博愛」の存在を身をもって知ったのです。

以来私の胸の奥にはこの無償の愛に応えるために、何かを成さねばならないと言う思いが深く根差し、怠惰な心を常に鼓舞してくれました。

14年前創刊した点字の英語月刊誌” The Japan Braille News" は現在世界52カ国の盲人読者に読まれていますが、この活動が今日まで継続できたのは、多くの人の暖かい、支援に加えこの様な思いに支えられたからです。

終わりに、50 周年を向かえたフルブライト・プログラムの更なる充実発展を祈ると共に、私も公平なチャンスを分ちあう真に豊かな社会の到来を信じ、その実現に向かって応分の役割を果したいと願ってやみません。（１９５７－５８，ボストン大学）

私にとっての Fulbright Program

和爾赳城

私は、1960年（昭和35年）、東京大学工学部航空学科を卒業し、新三菱重工（のち合併により三菱重工）名古屋航空機製作所に、航空機の開発設計者を目指して入社しました当時の航空宇宙分野の状勢を、少し脇道になりますが、ごく大雑把に背景説明をしておきます。ご承知の方もおられるかと思いますが、第二次大戦後約十年余りの間、敗戦国である我が国は航空宇宙分野の研究開発や産業活動が禁止されました。不幸なことには、ちょうどその間に、ジェット・エンジンの実用化による高速航空機（亜音速、または超音速）の出現や、大気圏外にまで飛翔できる大推力ロケットの開発と、人工衛星実現の目途付けなど、航空宇宙関連の科学技術は、その歴史上最も重要かつ飛躍的な進展を遂げたと言えます。1955年（昭和30年）、航空学科がようやく名実ともに再開され、私が教養課程から学部進学の方向を決めようとしていた1957年（昭和32年）には、ソ連の人工衛星スプートニクが、米に先駆けて初めて地球を周回しました。

このように、私の学生時代には、既に航空宇宙分野の主流は米、ソ二大国に移り、この分野の学界、産業界の主要な情報は、西側の我々にとっては、英語を通じてしか得られない状態でした。教材や主要な文献は、殆どが米国のものでした。大学の恩師のなかには、戦後米国に留学された方々もおられ、そのご経験談等に、大変な刺激を受けたものです。私の卒論は、&ldquoAerodynamics of a rarefied gas flow"と題する、当時としては、流体力学のなかでも、開拓途上の分野でありましただけに、基本的な教科書、関連する研究報告書等、殆どすべての文献は英文で書かれたものでした。

このような環境を経て、会社に入り、高速機の空力設計の道を進むことになった私の願望は、一時も早く米国に留学し、先進分野の勉強と、出来れば研究の一端もそこで進めたいという一点でした。目指す留学先は、私の卒論がきっかけで、その道の大先生のおられるプリンストン大学航空工学科に、ほぼ決まっておりました。ところが問題は、当時、会社の認めてくれる米国留学の必須の条件は、留学の目的が会社のニ

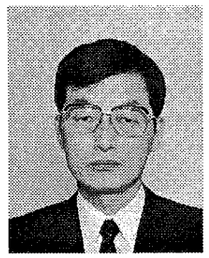
ーズとか職場の都合に合致していることは当然として、Fulbright Program の試験に合格することでした。
当時の私にとって、英語の、読み書きはともかくとして、oral の面で、この試験は大変な難関でした。今とは違って、hearing 能力の訓練のための教材は、リンガホンや BBC のレコードと FEN (Far Eastern Network) の放送ぐらいのもので、ほかには週二回、外人のお宅で会話の実践を行うのが関の山でした。勿論、週五日、8 時から１６時までの勤務時間には仕事をした上で、残りの時間で練習しなければならず、時間の捻出に苦心したものです。幸いにして、入社後一年たらずの準備期間で、条件付きで合格させてもらいました。条件とは、東京の語学学校で、一ヶ月半ほど、さらなる研修に専念するというものです。会社の理解を得て、この条件を満たした上で、プログラムの一環であるオリエンテーションを受けるため、ペンシルベニヤ州のルイスバーグに向かって日本を出発したのは、1961 年（昭和 36 年）7 月の半ばのことでした。

一ヶ月半にわたるオリエンテーションでは、米国の歴史や文化の紹介や、日本人はもとより他の国ぐにからのフルブライターとの交流等、有意義なプログラムがもり沢山組み込まれていましたが、私にとっては、もっぱら oral English の blush up が最重点課題でした。しかしながら、それまで約一年以上の、hearing and speaking 能力向上に関する私なりの努力にもかかわらず、九月初め、最終目的地のプリンストンに入った初日から、日々の生活、大学院での受講や研究活動を通じて、私の前には language barrier が大きく立ちはだかってきました。ようやく、その年の十二月頃になって、言葉の問題での大きな不具合や不自由から開放されたような気がします。

顧みまして、私にとっての Fulbright Program は、その時代における自分の専門分野の、先端的科学技術習得の機会を与えてくれた、非常に意義深いものであったことは言うまでもありませんが、長い人生の中で考えてみますと、それにも増して大きな意味があったと思います。それは、このプログラムが与えてくれたチャンスを、掴み、活かすために、身につけざるを得なかった（というべきか）英語力と、その結果としての英語を話す人々に関する理解、つまり、その歴史、文化、生活、物の考え方についての理解の深まりです。
これらは、後年、設計部門での外国他社との折衝や共同開発の話し合い、企画部門での海外調査やそのためのインフォーマルな対話、経営者の一端として海外他社の経営陣との交渉や付き合い等々、会社生活で多大のメリットをもたらしてくれました。また、個人的にも、読書とか海外旅行、その他海外の諸情報に接するたびに、その恩恵に浴しています。

デラウエアー大学への留学

山田健治



1978 年 9 月から 1979 年 8 月まで、当時勤務していた岐阜経済大学よりアメリカ東部のニューヨークとワシントンのほぼ中間にあるデラウエアー大学に、フルブライト留学生として滞在する機会を与えられた。

１年間の滞在期間であるから、経済学部の修士課程の「単身赴任」留学生としてまたとない経験をした。聞き取れない授業に、鉛筆の動かぬテストに、何度も書き直してもらうレポート作成に、日本人宅に日本料理の強要など、汗かき、恥かきの悲喜劇の連続であった。

いやなことはさておき、よかった点を次に述べてみよう。

１．著書執筆につながる研究テーマを絞り込めたこと

海洋資源の経済分析に興味を持ちこの大学を選んだが、たまたま訪れた「法と経済」担当教授の助言により、くしくも「北海石油研究」への道が開け小生の学位論文執筆の発端になった。

２．大国に生きるということと小国に生きるということの違い

学生仲間に、イタリア系アメリカ人とオーストリアからきた社会人学生がいた。二人の当時のソ連への対応の違いをまざまざと見せつけられ、映画「第三の男」の本質を見た思いがした。

３．日本では日本をけなすが、アメリカでは弁護する側になること

留学期間が短かかったのか、滞在中頃から「留学愛国者」になった。発端は、各国料理を披露する昼食会で日本について話せといわれて、日本の内外価格差を弁護したとき。時あたかも、日本の造船業界で人員整理が開始され、アメリカではホンダ車などがプレミアムをつけて売れていて、自動車の輸出価格が不当に安いといわれていた時期であった。

４．心残りなこと

当時の授業科目であった「先物市場論」や「規制と経済」を受講しておくべきであった。帰国間際であり、ちょっとどん欲さに欠けていた。

当時の熱気に満ちた大学院生研究室がいまだに目に浮かぶ。また、「ここから毎年試験ができずにストレスで自殺する人もいる」という冗談とも思えぬ陽気なイタリア人の学友の声も。

現在、日本の大学改革が目指すものはすべて当時のアメリカにあった。人生の３０

代後半に比較的昔を大切にする地域でアメリカンシャワーを浴びれたことは、人生の後半に大いにプラスとなった。

Busy as a Bee

森　あおい

このエッセイを書くに当たって振り返ってみると、フルブライト奨学生として State University of New York at Buffalo の大学院に入学できたのは、今から１０年前の１９８９年８月のことでした。出発前は、出たとこ勝負で、どのくらいの期間滞在できるのか、学位が取れるのかどうかも見当がつかない状態だったのですが、幸い、２年目には、大学の授業料免除を受けることができた上、夫も同時期に Maryland 州の John Hopkins University の大学院に research assistantship を得て留学することになり、結局、博士論文のめどがつくまでの４年半をアメリカで過ごすことができました。留学中は学位取得のためにひたすら頑張り、１９９４年の夏に、口頭諮問に合格し、翌年、博士号（Ph.D.）を授与されました。その後、名古屋で非常勤をしていましたが、１９９７年４月より、広島女学院大学の文学部に赴任し、現在、慌ただしい毎日ではありますが、充実した生活を送っています。

私が留学生活を送った Buffalo はニューヨーク州の第二の都市です。といっても、人口は５０万人足らずで、New York City から西に４００マイルほど離れており、カナダとの国境近くに位置しています。ナイヤガラの滝の近くと言った方がわかりやすいでしょうか。緯度からいうと、函館と同じあたりなので、冬の寒さは大体ご想像頂けるとおもいます。一年の半分近くが冬で、雪の中に閉じこめられているような気がいたしました（少しおおげさですが)。尤も、その閉ざされた環境ゆえに、勉学に専念できたと言えるかもしれません。

専攻は English でしたが、研究対象が黒人女性作家（Toni Morrison ）だったので、関連科目として American Studies から African-American Studies や Gender Studies の授業をとりました。どちらかというと、English Department は traditional な雰囲気ですが、American Studies は個性的な人が多く、リベラルな印象を受けました。菜食主義者が多いのも American Studies の人達の特徴だったかもしれません。Department の集まりでは、隣に座った人から「お一つ如何？」と差しだされるのが、人参やセロリのスティックやブロッコリーでしたから。

すこし脇道にそれてしまいましたが、American Studies の主催で、女性問題についてのパネルディスカッションにパネリストとして参加し、ドイツ、インド、韓国、メキシコ等の国々からの留学生と共に、世界の女性のおかれている状況について話し合うことができたのは、とても貴重な体験でした。多様性を重視するアメリカの大学で学ぶことで、日本にいて文献を読むだけでは決して想像もつかなかった人種、性別、階級の差異の問題などについて、肌で感じることができたと思っています。

お陰様で、博士論文の方も、その後手を入れ、Toni Morrison and Womanist Disclourse というタイトルで、この春にはニューヨークの Peter Lang Publishing Inc.から出版されることになりました。１９９３年にノーベル賞を受賞した Toni MOrrison に関する批判書ですが、興味のおありの方は、是非ご高覧頂き、また、御批判等いただければ幸いです。最後は自分の本の宣伝になって恐縮ですが、この本のきっかけがフルブライトのあることを感謝して、結びとさせていただきます。

米国人 Fulbrighter 紹介

１９９８年度に中部地区に来られているフルブライターは以下の２名です。

Mr. Michael T. Oliver :Fulbright fellow（9/8/98-9/7/99）
（Amherst College, Economics B.A. May 1998）
受け入れ先・教員　名古屋大学経済学部・太田聡一助教授
Assis.Prof. Paula K.R. Arai: Fulbright Researcher（7/1/98/12/31/98; 7/1/99-7/31/99）
（Religious Studies, Vandervilt University）
受け入れ先・南山大学、Nanzan Institute for Religion and Culture

会員だより

○　木村　尚（１９５５，ＭＩＴ）
暇になりましたので、粉末冶金の歴史をまとめています。

○　長坂源一郎（１９７２，ボストン大学）
お陰様で何とか達者でポチポチやっています。最近、Japanese Studies in the Philosophy of Science という書物をオランダの本屋から出しました。Boston Studies in the Philosophy of Science Vol.45 です。

○　多田尚夫（１９５０，パデュー大学）
ガリオア１期生として米国に滞在したのは、１９５０－５１ですから、間もなく５０年になり、若き日の思い出になりました。当時の米国は、いわゆる Good Old Days で、誠に良き時代、又敗戦の後の日本と余りにも違い、すばらしい国に来たと思った次第です。昨年より完全に Free となり、Life を enjoy して居ます。

○　稲木せつ子（１９８９，メリーランド大学）
２年前に日本テレビを依願退職いたしました。現在はフリーの契約スタッフの形で働いております。今年は長野五輪、仏のワールド杯で点々としましたが、ベースはオーストリアのウィーンです。夫もオーストリアから留学していた”フルブライター”です。

○　小坂敦子（１９８６，School of Int'l Training）
就職１年目ということで、まだ時には戸惑いながらも、元気に過ごしております。昨年１１月下旬は研究会の発表や本年の学会のアブストラクト提出などがあり、時間を上手に作ってがんばりたいと思っています。

○　畑　光夫（１９５７，アメリカン大学）
昨年１０月１３日（火）フルブライト・メモリアル・ファンドで訪日のアメリカの先生方を案内し、小学校訪問をしました。常葉学園大学大学院国際言語文化研究科長、学部英米語学科長兼務で多忙です。

○　坪井由美（１９８３，コロンビア大学）
あわただしい毎日ですが、わが国の地方教育行政改革のあり方について、アメリカとの比較で研究を進めております。

○　土岡弘通（１９６０，Philadelphia General Hosp.）
老人保健施設「みどり」の施設長として、７０歳以上の高齢者のお世話をしております。お陰様で元気に多忙な毎日を送っています。

◇　高仲　顕（１９５１，パデュー大学）
本年（1998）６月に（社）中部産業連盟副会長を創立５０周年を機に、高齢の故をもって退任しましたが、却って多忙になり、シンガポール、台湾、メキシコなどの海外だけに限らず、国内でのセミナー・訓練に追われています。

○　降旗武彦（１９６０，ミシガン大学）
１９６０－６２年までの２年間、ミシガン大学へ留学、研究滞在費はロックフェラー財団より、旅費のみフルブライト委員会より支給していただきましたが、滞在中、フルブライト奨学生としての数々の恩恵に浴し、今でも感謝と共に、懐かしく想い起こしております。

□　水谷　昭（１９６３，イェール大学）
現職を退いてから、来春で満５年になります。その後も、大学、看護学校その他への講義の出前で、結構緊張感のある生活を続けております。

☆　山田豊太郎（１９５２，Wayne State U）
現在、外国の文献・資料の翻訳などにつきお手伝いをしています。体調も、もう１つといったところです。

○　早川　操（１９７８，コロンビア大学）
学部改組によって、来年度から学部教育が忙しくなりそうです。多の大学や学部でも同様だと聞いております。健康に留意して職務を遂行していきたいものです。

□　井改　実（１９５９，メリーランド大学）
日米共同で開発していた＜地上支援機＞が正式採用になり、以前勤めていた三菱重工名航からの技術資料の英訳の依頼が間遠になりました。その分、bowling や囲碁に精を出しております。「楽しく、美しく、大らかに」を座右の銘として、bowling では

２５０ up を目標に、囲碁では碁敵と対で打てることを目標に、修練を重ねています。合間には、＜線と悪＞の問題に沈潜しながら。

◇　太田　宏（１９６５，ハーバード大学）
医療政策の改訂が続き、医療界も一般の経済状態と同じように厳しいですが、良心的な診療と医師の生涯教育の推進に励んでおります。

○　阿曽佳郎（１９５９，Sinai Hosp. Baltimore ）
諸般の事情厳しく、田舎の病院長業も経営という、今までに経験のない分野で苦労しています。その甲斐あって、経営状態は向上しています。

□　藤吉徳和（１９６６，ミシガン大学）
不況のため、高校生の大学志願状況が大きく変わりつあり、一日もはやく「景気が悪い」という雰囲気が除かれることを願っています。

☆　篠田啓一（１９６０，イリノイ大学）
大学に移って４年目。右も左もわからないまま、昨秋、初めて文部省の科学研究費の新生をしました。プロの先生方には何を今更、と笑われるのも承知で鉛筆をなめなめ書き上げました。このような年輩者が昨今の経済不況の折りに若い研究者の研究費を少なくするのは気が引けるな、と思いつつ出願しましたが、反面、受理されたら、と年甲斐もなくわくわくしています。

△　今辻三郎（１９６８，オクラハマ大学）
ヒアリングのキープアップのために、スポーツのテレビ英語放送（実況）を聞けないかと試みています。同好の方のご指導を願います。

○　曽我美　勝（１９６０，パデュー大学）
１９９０年、岐阜大学医学部停年、１９９６年、藤田保健衛生大学衛生学部定年になり、現在データの整理と論文書きに追われています。昨年１１月、第３７回 NMR 討論会で発表のため横浜に参りました。１９６０年フルブライト・教授研究員カテゴリーで、氷川丸の最後の航海で、家族同伴でアメリカへ出発しました。３８年ぶりに氷川丸の見学に横浜港を訪ねてきました。

報　告

○総会記録
平成１０年度の中部同窓会総会は、名古屋大学大学院国際開発研究科において、６月２０日（土）午後３時から、会員１８名とゲスト４名の出席を得て開催された。はじめに、会長の挨拶と新会員の紹介があり、引き続いて総会議長に上田慶一幹事を選出して議事を進めた。議事の主な内容は、以下の通りである。

1.　平成９年度事業報告の件（平成９年４月ー平成１０年３月）：総会の開催（平成９年６月２０日）、例会の開催（平成９年１２月５日）、役員会の開催（４回）、会報 " Fulbrighter　in Chubu" の編集と発行、会員名簿の改訂と発行、フルブライト夫人歓迎レセプション　への出席（会長）、第４回ガリオア・フルブライト個人募金活動への協力、フルブライト記念財団の米国教育者招聘プログラムへの協力（静岡県在住の会員）
2.　平成９年度決算方向ならびに監査報告の件：別紙の通り承認された。
3.　役員の交代の件：東京に転出した大石副会長の後任として和爾赳城会員が提案され、承認された。引き続き和爾新副会長から就任の挨拶があった。
4.　平成１０年度事業計画案の件：総会・例会の開催、役員会の開催、Newsletter　の発行などについて説明があり、承認された。
5.　平成１０年度予算案の件：別紙の原案通り承認された。

総会終了後、フルブライト・フェロウのブドロウさん（名古屋大学工学部）によるゲスト・スピーチ「仮想世界における多言語通信の検討」があり、スピーチについて活発な質疑応答があった。またブドロウさんの指導教官である岡田先生（工学部、情報工学）からの補足説明があった。
スピーチ終了後、会場を一階のプレゼンテーション・ルームに移して懇親のパーティを開いた。パーティでは、ゲストを含めて出席者同士の話が弾み、当初の予定より３０分おくれ、６時班過ぎに閉会となった。
総会に出席されたゲストと会員は以下の通りです。（敬称は省く）
ゲスト：Christopher R. Boudreau, Steven Bailey, Jeffrey M.Jamison, Daniel ShieldsIII, 岡田稔
会員：石川進、館野壽秀、木村尚、吉田昭、篠田啓一、和爾赳城、上田慶一、篠田靖子、片山厚、太田宏、今辻三郎、梅沢時子、木下宗七、千田純一、古橋宏造、若林満、市川紀男、David M. Henderson

○例会記録

中部同窓会の例会は、昨年１２月１１日（金）の午後６時半から、名古屋アメリカンセンターの会議室で開催された。ゲストとして、日本銀行名古屋支店長の原田靖博さま、アメリカンセンター館長と副館長、領事、フルブライト・フェロウをお招きし、総勢２３名の出席を得て、会員ともども楽しい時を過ごすことが出来た。

はじめに会長の挨拶とフルブライト・フェロウの紹介があり、続いて、千田副会長の司会でゲスト・スピーカーの原田さまから、「最近の金融経済情勢について」というテーマで約１時間のスピーチをしていただいた。今日本で起こっている、歴史的にも異常と言える金融経済情勢の背景とそれに対する日銀の政策およびこれからの金融システムの方向について丁寧な解説をしていただいた。やっと政府・日銀による金融システム安定化のための枠組みが出来上がったので、これからは当事者である金融機関がどのように改革を進めて行くかにかかっている、というのが結論のようであった。詳細は、講演内容をお読みいただきたい。

ゲスト・スピーチ終了後、会議室の模様替えをして、和爾副会長の進行で懇親のパーティに移った。会員相互の懇談と共に、ここでも、ゲストの原田支店長さんを囲んで、スピーチについての意見の交換が続いた。９時近くに閉会とした。

当日の出席者は以下の通りである。（敬称略）

ゲスト：原田靖博、J.M.ジャミソン、服部正夫、D.L.シールズ、M.T.オリバー

会員：今辻三郎、石川進、岩崎一生、木村克美、木村尚、松浦以津子、諸戸愛子、篠田啓一、篠田靖子、千田純一、曽我美勝、館野壽秀、角岡秀彦、上田慶一、梅沢時子、和爾赳城、若林満、渡辺純、

役員会

第１回役員会

日時：１９９８年4月２４日　午後６：３０－８：００

場所：経済学部会議室

出席：木下、今辻、篠田靖、若林

＜報告＞

１．活動（総会以降）

３月１１日　Mrs. Fulbright の歓迎レセプションへ会長出席

各地区の同窓会代表、冠寄付の企業代表者、日米教育委員会、アメリカ大使館関係者が出席。フルブライト夫人による人メリーランド大学に建設中のフルブライト国際センターの紹介と支援の要請

２．The Fulbrighter in Chubu の編集と発行

２００部印刷、会員、他地区同窓会、講演者、随想執筆者、日米教育委員会に郵送。

３．会員名簿の編集と発行

１６０部印刷。会員に郵送。

４．講演者への謝金の支払い。

総会の講演者、シールズさんへの謝金（篠田啓一氏の立て替え分）

れいかいの講演者、加藤総長への支払い。

５．４月１７日　同窓会全国理事会へ千田・副会長が出席。　中部の活動を報告。

Fulbright Meririal Fund のプログラムへの協力依頼あり。１１月１１－１９日、静岡市にアメリカからくる参加者（２０名の教員）との交流のため。

６．名簿事項訂正

井改実　電話番号変更　0562-91-1336

岩崎秀一勤務先の変更・訂正　名古屋外国語大学を退職、名誉教授
名古屋大学元教授（名誉教授を訂正）

平川千里　勤務先変更　神戸女学院大学を退職

森あおい　住所変更　468-0001　名古屋市天白区植田山 1-1311
電話 052-781-8266　　e-mail aoi@ma2.seikyou.ne.jp
勤務先住所　732-0063　広島市東区牛田東 4-13-1 広島女学院大学文学部　　電話　082-228-0386

７．訃報

小出忠四郎氏（名古屋大学名誉教授）　４月１５日逝去　会長名で弔電。

＜議題＞

１．副会長の選任

大石副会長（勤務先の変更で東京に転出）の後任としては、企業関係から選任することとし、和爾赳城会員（三菱重工・名航製作顧問）に交渉することとした。

２．総会の開催

本年度の総会について、日時は５月末－６月の土曜日午後、場所は名大国際開発研究科の会議室か市内の会場、ゲスト・スピーカーをフルブライト・フェロウの Boudreau さん（名大工学部・情報工学）に依頼することとした。

３．フルブライト・記念財団（ＦＭＦ）への協力

財団から、静岡市を訪問するアメリカの教員の応援をお願いしたいとの依頼が同窓会宛にきたが、昨年の経験（同じく静岡市を訪問）を踏まえ、静岡在住の会員にお願いすることとした。

４．本年度の事業と役割分担

ニューズレターの編集（昨年の委員にお願いする）と発行、例会の開催（秋）とし、名簿は来年度とすることとした。

第２回役員会

日時　６月２０日　１：３０－２：３０

場所　経済学部一階センター会議室

出席　木下、千田、今辻、篠田啓、篠田靖、梅沢、上田、若林

＜議題＞

1. 総会の議事内容について

次のように総会での議事内容を決めた。

１．平成９年度の事業報告、決算／監査報告

２．副会長の交代と挨拶（和爾赳城 さん）

３．平成１０年度の事業計画　予算案

４．その他（例会の幹事の選出など）

2. 総会での役員の役割分担について

総会の議長（千田）、事業報告担当（総括（木下）、ニューズレター（篠田靖）、会計（木下）、記録（今辻））、監査報告（篠田啓）

また、総会でのスピーチの司会（梅澤）、懇親会の司会（上田）と決めた。

第３回役員会

日時：１０月02日（金）　１８:３０－20：００

場所：名古屋大学経済学部　センター会議室

出席者：木下、千田、篠田（啓）、篠田（靖）、梅沢、若林、今辻、和爾

＜報告＞

1. 会費納入状況について

平成１０年度の会費納入実績について、１０月２日現在で新入会員分を含めて 100 名であり、今年度予算で想定した 90 名を上回っていることが報告された。

2. 会員移動について

総会以後、羽澄会員が逝去されたこと、中部大学の渡辺純氏から入会の申し入れがあり、入会を受け付けたことが報告された。

3. 中部地区へのアメリカからのフルブライター受け入れについて

今年度はフルブライト・フェロウとして Michael T. Olivers さん(Amherst College, Economics)を名古屋大学経済学部が、またフルブライト研究員として Paula K.R.Arai さん（Vanderbilt University, Religious studies)を南山大学宗教文化研究所が受け入れていることが報告された。

4. フルブライト・メモリアル・ファンド（ＦＭＦ）のプログラムについて

昨年度より日本政府の全額拠出によるＦＭＦで、アメリカ各地のの小中学校の先生と教育関係者を日本に招き、地域レベルまでおりて日本の学校教育と文化につての相互理解を深めようとするプログラムが始まっており、本年度からは各地のＧＦ同窓会が全面的に協力することになった。中部地区では静岡県が 10 月１１日から１週間、19 名を受け入れることになり、静岡在住のフルブライターに協力してもらうことになった、と報告があった。

＜議題＞

１．例会の開催について

会長から、今年度も秋の例会を開催する事にしたい、ついては時期、曜日、場所、ゲスト・スピーカーについて決めていただきたいと提案があり、種々討議の結果、

時期：１１月下旬ないし１２月上旬の金曜日の夜ないし土曜日の午後

場所：金曜日の場合はアメリカン・センター、土曜日の場合は名古屋大学

ゲスト：スピーチのテーマとしては、バブル後の日本経済-とくに現在の金融不安について、とし、この分野の専門家に交渉することとした。

２．ニューズレターの発行について

会長から、今年度のニューズレターを、同様の内容で年度末に発行することにしたい、執筆者について検討していただきたいと提案があり、以下のことを確認した。

随想：分野、渡米年次などを考慮して、５名の会員に依頼する

会員便り：事務局宛の近況報告などをもとに編集する

総会スピーチ：分量を調整し、研究指導された岡田先生に解説文を書いていただく。

３．その他

会長から、来年度は役員（２年任期）の改選時期に当たるので、役員の構成や事務局の運営について、検討しておいていただきたい、という提案があり、了承した。

ガリオア・フルブライト中部同窓会
総会（平成１０年６月２０日）

平成９年度収支決算書（平成９年４月～平成１０年３月）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	428,971		役員会費用	51,350	食事代
金利収入	878			8,500	アルバイト
年会費	342,000	@3,000*110	総会費用	39,000	郵便代
		@2,000*1		90,000	パーティ代
		@10,000*1		10,000	アルバイト
		（南山大学）		19,635	講演謝礼
総会会費	78,000			4,844	雑費
			例会費用	17,550	郵便代
				69,390	パーティ代
例会会費	66,000			3,000	準備ｱﾙﾊﾞｲﾄ
				15,000	例会ｱﾙﾊﾞｲﾄ
				20,000	講演謝礼
特別収入	79,881	旧通帳より	印刷関係費	47,250	ﾌﾙﾌﾞﾗｲﾀｰ印刷
				29,400	名簿印刷
				33,500	郵送費
			通信費	22,000	会員アンケート
				5,230	役員会連絡ほか
			旅費	19,520	東京出張
			次期繰越	471,245	
	995,730			995,730	

注記：（１）特別収入は１０年前の同窓会名義の郵便局通帳が発見されたため。
（２）旅費は東京で開催されたフルブライト夫人のレセプション（３月２０日）出席のための新幹線代。

平成９年度の収支決算の内容につき証憑書類によって監査を行なった結果、適当妥当であることを認め、ここに報告致します

平成１０年６月２０日　　監査　篠田啓一　印

ガリオア・フルブライト同窓会
総会（平成１０年６月２０日）

平成１０年度収支予算案（平成１０年４月～平成１１年３月）

収入の部			支出の部		摘要
科目	金額	摘要	科目	金額	開催費
前期繰越	471,245		役員会費	50,000	
金利収入	1,196		総会費用	35、000	郵便代
年会費	280,000	@3,000*90		70、000	パーティ代
		@10,000*1		8、000	準備アルバイト
				15、000	アルバイト
				20、000	講演謝礼
総会費	66,000	@3000*22	例会費用	20、000	郵便代
				70、000	パーティ代
				5、000	準備アルバイト
				15、000	アルバイト
例会費	66,000	@3,000*22		20、000	講演謝礼
			印刷関係費	45、000	ﾌﾙﾌﾞﾗｲﾀｰ印刷
				5、000	アルバイト
				30、000	発送費
			通信費	5、000	役員会連絡ほか
			旅費	40、000	全国理事会出席ほか
			次期繰越	431、441	
	884,441			884,441	

会員移動：名簿変更

■野 田 稲 吉（永眠）
羽 澄 英 治（永眠）
小山 忠死郎（永眠）
○江 口 昇 次（職名）名古屋大学名誉教授
平 川 千 里（勤務先）神戸女学院大学退職
猪 飼 公 郎（職名）医療法人中央会理事長退任
岩 崎 秀 一（職名）名古屋外語大学名誉教授
三 宅 政 子（住所）466-08　名古屋市昭和区広路町雲雀岡 1-502
森　あおい（住所）468-00　名古屋市天白区植田山 1-1311
田 中　　寛（住所）461-0001　名古屋市東区泉 1-18-10-1203
◎ Daniel L. Shields, III（入会、ゲスト）460　名古屋市中区錦３丁目 10-33
名古屋アメリカ領事館　領事
Henderson,David H.（入会、会員）448-0011　刈谷市築地町長辻 85-3　ｼｬﾄﾚﾍﾞｰﾙ

青山 401　　アイシン精機　1996　広島修道大学　フルブライト・フェロウ
Schalow, Thomas R.（入会、会員）466-0023　名古屋市昭和区石仏町 2-1-40-302
光陵女子短期大学助教授
稲木 せつ子（入会、会員）459-8001　名古屋市緑区大高町鷲津３１稲本昌司様方
ジャーナリスト　1989　メリーランド大学　ジャーナリズム
岩 崎 一 生（入会、会員）458-0000　名古屋市緑区有松町橋東南 9-1-701
名古屋大学国際開発研究科教授　1981　ニューヨーク大学　国際取引法
遠 州 尋 美（入会、会員）456-00　名古屋市熱田区大宝 2-4-4-201
日本福祉大学経済学部助教授　1990　カリフォルニア大学　建築学
加 瀬 正 幸（入会、会員）431-1112　浜松市大人見町 12-210
静岡県立大短期大学部教授　1959　テキサス大学　英語教育
木 村 克 美（入会、会員）444-0035　岡崎市竜美南 2-9-12
分子科学研究所名誉教授　1960　コーネル大学　physical chemistry
木 村 和 夫（入会、会員）438-0215　静岡県磐田郡竜洋町小中瀬 410
愛知大学文学部教授　1956　アメリカン大学　英語教育
木 下　　徹（入会、会員）464-0083　名古屋市千種区北千種 3-3-2-713
名古屋大学国際開発研究科助教授　1989　カリフォルニア大学　言語学
小 坂 敦 子（入会、会員）470-0155　愛知郡東郷町白鳥 3-20-5 ﾌｫｰﾚｽ東郷Ａ 102

愛知大学法学部講師　1986　School of International Training　英語教育

森 岡 俊 夫（入会、会員）503-0864　大垣市南頬町 1-44-8
大垣女子短期大学教授　1962　ワシントン大学　歯科学
坪 井 由 美（入会、会員）480-0201　愛知県西春日井郡豊山町青山 789
愛知教育大学助教授　1983　コロンビア大学　教育制度
渡 辺　　純（入会、会員）487　春日井市白山町 1-61-5　２号棟 402
中部大学工学部教授　1981-83　プリンストン大学　建築設計
山 田 高 敬（入会、会員）490-1142　愛知県海部郡大治町三本木 74
椙山女学園大学講師　1984　カリフォルニア大学　国際関係論
☆伊 藤 陽 一（退会）
唐 沢　　穣（退会）
桐 谷 道 雄（退会）
大 石 秀 夫（退会）
立 川 武 蔵（退会）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事務局より

事務局を名古屋大学に移動して２年目の１９９８年度も、皆さまの協力により、総会でお約束した事業計画に従って活動することが出来ました。集まりの開催曜日については、総会を土曜日の午後、例会を金曜日の夕方というように実施してみました。さらに、皆さんのご意見をうかがい、多くの会員が参加できる時間帯を探してみたいと考えております。

会費の納入につきましても、予算を上回る成果を上げることが出来ましたが、お忘れの会員の方には、新年度でも結構ですからご協力下さるようお願いいたします。

なお、事務局を預かってきた木下会長が、本年３月末で名古屋大学を停年退職し、４月より椙山女学園大学に変わりましたので、99 年度の事務局をどのように運営していくか、目下役員で検討しているところです。新年度の総会で、検討の結果を報告できると思います。しばらくは、郵便と電子メールは従来のままで結構です。電話・ファックスでの連絡は、椙山女学園大学生活科学部生活社会科学科

電話　052-781-1186（代表）内線 647
fax　052-783-6732

にお願いします。

The Fulbrighter in Chubu No.9

発行年月日　平成１１年３月３１日

編　　集　編集委員会

発　　行　ガリオア・フルブライト中部同窓会

名古屋市千種区不老町１（〒464-8601）

名古屋大学経済学部研究室気付